様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 3 日現在

機関番号：１７６０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2010～2012
課題番号：２２５９２４８８
研究課題名（和文）小児慢性腎臓病思春期患者のセルフマネジメント支援プログラムの開発

研究課題名（英文）Development of a Self-management Support Program for Adolescents with Chronic Kidney Disease

研究代表者
野間口　千香穂（NOMAGUCHI CHIKAHO）
宮崎大学・医学部・教授
研究者番号：４０２３７８７１

研究成果の概要（和文）：本研究は、先行研究によって構築した看護介入モデルをもとに開発した小児慢性腎臓病思春期患者のセルフマネジメント支援プログラムを実施、評価し、臨床適用を検討することを目的に 2010 年より 3 年間行った。初年度か 2 年目にかけて、九州の 2 つの大学附属の医療機関の小児科外来に通院中の小児慢性腎臓病思春期患者 14 名を対象に開発したプログラムを実施した。事前事後質問紙調査と事後に半構成的面接調査を行い、本プログラムの影響を分析した。また、交渉スキル・トレーニングとプログラム全体の評価として、プログラム参加者に対して質問紙調査と面接調査を行った。その結果、本プログラムは自律したセルフマネジメントを促進し、その有用性が示された。また、プログラムに参加することが、参加者のピア・サポートの体験となっていた。3 年目には、臨床適用のために臨床看護師の学習ニーズを確認したため、今後臨床看護師の教育を行っていく予定である。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to develop and implement of a self-management support program for adolescents with chronic kidney disease (CKD), and to describe the effects of the program on these patients. The program was applied to 14 outpatient adolescents with CKD (6 males and 8 females). Data were collected though questionnaire survey at start of the program and after the program, intervention, and semi-structured interview following the program. Seven of the 14 subjects reported that the training contributed to an increase in direct communication with their doctors, or increased willingness to talk directly with them. The participants who attended both training sessions scored significantly higher on stress management self-efficacy (p=0.033). The patients who communicate with their doctor wanted to manage their health by themselves and felts supported by their parents and friends. Furthermore, 11 of the 14 subjects came to feel that “I am not the one who suffer from the disorder” through their experience in the program. The feasibility and effectiveness of this program was supported by evidence from these findings.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	700,000	210,000	910,000
2011 年度	900,000	270,000	1,170,000
2012 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総　計	2,600,000	780,000	3,380,000

研究分野：医歯薬学
科研費の分科・細目：看護学・生涯発達看護学
キーワード：小児慢性腎臓病　思春期　セルフマネジメント、スキル・トレーニング、介入研究

１．研究開始当初の背景
(1)多くの慢性疾患の子ども達が地域で生活し、医療の提供の場が外来へと移行した現在においても、思春期のセルフマネジメントに関する理論モデルの開発は十分ではなく、セルフマネジメントやその支援に関する研究対象となる疾患は１型糖尿病と喘息がほとんどである。

(2)慢性腎疾患に対しては、2007 年に慢性腎臓病の概念が導入され、小児領域でも小児慢性腎臓病が定義された。小児慢性腎臓病で思春期に多い疾患としては、ネフローゼ症候群と IgA 腎症があり、いずれも思春期に治療を要する場合は、成人期までキャリーオーバーすることが多い。小児慢性腎臓病の子どもや若者の体験に関する知見の不足が指摘される一方で、国内では思春期患者が医療者からの説明を求めていることや自己決定を求めていることが報告されているが、彼らを対象とした看護介入方法は開発されていない。

(3)小児慢性腎臓病思春期患者の行動決定に関する認知的プロセスにおける生活体験は、その後の病気の受容や病気のつきあい方を決定していく上で重要であることが示唆されているが、小児慢性腎臓病思春期患者のセルフマネジメントやその支援に関する研究はほとんどない。

(4) 申請者が行った「小児慢性腎疾患思春期患者のセルフマネジメントを支援する外来看護モデルの開発」の研究成果として、セルフマネジメントを支援するためには、思春期患者が親や医療者との交渉に必要なスキルを獲得することが必要であることが明らかとなり、そのことを基盤に看護介入プログラムとしてセルフマネジメント支援プログラムを開発した。

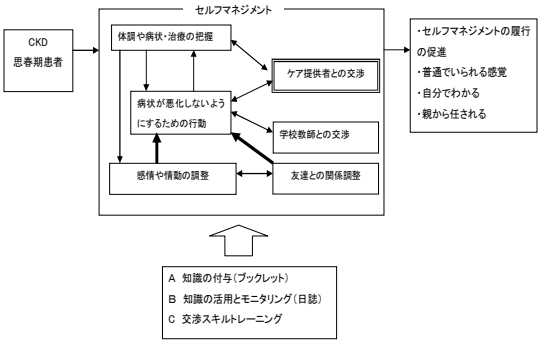

図１ 研究の枠組み

(5)(4)をもとに構築した研究の枠組みを図 1 に示す。開発したプログラムによって、思春期患者のセルフマネジメントの履行、わかる感覚、親からの責任の移行と自立、普通でいられる感覚を高めることができるというものである（図 1)。

２．研究の目的
本研究の目的は、小児慢性腎臓病思春期患者のセルフマネジメント支援プログラムを開発することである。具体的には以下のことを明らかにし、プログラムの評価を行うことである。具体的目標は以下の通りとした。

(1)セルフマネジメント支援プログラムのトライアルを実施し、小児慢性腎臓病思春期患者への影響を量的・質的に記述し、明らかにする。

(2)セルフマネジメント支援プログラムのトライアルを実施し、参加者のプログラムに対する評価を明らかにする。

(3)小児科外来看護への臨床適応のために小児科外来看護師のセルフマネジメント支援プログラムの実践上の困難と学習ニーズを把握する。

３．研究の方法
1）小児慢性腎疾患思春期患者のセルフマネジメント支援プログラムのトライアル
(1)対象者
九州の 2 つの医療機関の小児科外来通院中の小児慢性腎臓病思春期患者（12 歳～15 歳：中学生)。当該病院の倫理審査委員会にて承認を得た後、対象者に協力を依頼し、子どもと保護者の同意が得られた者を対象とした。対象者の選定に際しては当該施設の外来医師に協力を得て行った。
(2)プログラムの展開
プログラムのプロトコール、ならびに交渉スキル・トレーニングの実施要領を作成し、それに沿って、プログラムを実施した。プログラムの骨子は、①セルフマネジメントブックレット、②セルフマネジメント日誌、③2 回の交渉スキル・トレーニングの 3 つであった。
(3)データ収集方法
①事前調査と事後調査（図 2）

事前調査（Time0）は質問紙調査を行った。事後調査（Time8w 以降）は、質問紙調査と面接調査を行った。

質問紙調査の測定用具は、セルフマネジメント履行として(a)知識テスト、(b)慢性腎疾患のセルフケア行動尺度（石川ら,2004）、(c)自己管理スキル尺度（竹鼻,2004）、(d)学校生活スキル尺度（飯田ら,2007）、わかる感覚として(e)ストレスマネジメント自己効力感尺度（大野,2002）であった。面接調査では「セルフマネジメントの履行」「わかる感覚」「ふつうという感覚」に対する影響について半構成面接調査を行った。

Time 0	Time （4w 後）	Time（8w～）
ブックレット配布		
日誌配布		
ST 1 回目	ST2 回目	
事前調査		事後調査

（ST：スキル・トレーニング）

図 2　調査スケジュール

②交渉スキル・トレーニングおよびプログラムに対する参加者の評価

2 回の交渉スキル・トレーニング終了後、参加した感想を質問紙で求め、事後調査の際にプログラム全体の感想を質問紙で求めるとともに面接調査によるデータを得た。

(4)データ分析方法

質問紙調査結果は量的変化とその関連要因について分析した。面接調査結果は逐語録を作成し、内容分析を行った。それぞれの分析と両方の結果を統合して分析した。

(5)倫理的配慮

聖路加看護大学研究倫理審査委員会での審査、ならびに協力施設の研究倫理審査委員会の審査を受けて、承認された（聖路加看護大学研究倫理審査委員会承認番号：09－056）。

2）小児科外来看護師の小児慢性腎臓病思春期患者のセルフマネジメント支援プログラム実践上の困難と学習ニーズの面接調査

研究協力を得た医療機関で、小児病棟に勤務する看護師に対する面接調査を行った。

４．研究成果

1)セルフマネジメント支援プログラムの影響

(1)対象者の背景

2 施設（グループ X、グループ Y）で、高校生 2 名を含む 14 名（男子 6 名、女子 8 名）の小児腎臓病思春期患者がプログラムに参加した。疾患は、IgA 腎症、ネフローゼ症候群、ループス腎炎等であった。

(2)セルフマネジメントの履行に対する影響

①交渉スキル・トレーニングによる影響として語られた変化は、「自分で言うようになった」5 名、「自分で言ってみようと思った」3 名、「変わらない」3 名、「もともと自分で言っていた」3 名の 4 つの群に分けることができた。

②事前事後調査で用いた疾患知識、慢性腎疾患のセルフケア行動尺度（以下、セルフケア行動尺度）、自己管理スキル尺度、学校生活スキル尺度の本研究における信頼性係数は、順に 0.687、0.794、0.517、0.838 であった。

③事前事後調査の変化については、交渉スキル・トレーニングに 2 回とも参加した 12 名を分析対象として事前事後調査の得点を比較した。各尺度得点の中央値（範囲）は、疾患知識得点の前 31.0（24－35）後 30.5（25－36）、セルフケア行動得点は前 56.0（45－76）後 54.5（43－78）、自己管理スキル得点は前 25.5（21－31）後 25.0（17－31）、学校生活スキル得点は前 64.0（51－75）後 64.0（57－73）で、事前事後調査の得点には有意な差は認められなかった。グループ X では、疾患知識、セルフケア行動、自己管理スキルで事後得点の増加が、グループ Y では学校生活スキルで事後得点の増加が認められた。しかし、グループ X とグループ Y の間も事前事後調査での得点について有意な差は認められなかった。

(3)わかる感覚とふつうという感覚に対する影響

①わかる感覚として測定したストレスマネジメント自己効力感は、事前事後調査における得点には有意な差が見られ、事後の得点が高かった（p=0.033）。交渉スキル・トレーニングによる変化のタイプの 4 群のうち、『変わらない』群は他の 3 つの群と比較すると得点が低い傾向が見られたが、4 群とも事後得点が高くなっていた。面接調査では、医師との直接的な交渉がわかる感覚を強化するものとして語られた。

②彼らの「ふつう」という感覚は、【病気を意識しない生活】であった。それは、病気を意識しないで学校生活など普段の生活を過ごせていることとして語られていたが、プログラムによるふつうという感覚に対する影響は語られなかった。

2)セルフマネジメント支援プログラムに対する参加者の評価

協力を得られた 2 つの医療機関ごと（グループ X、グループ Y）に、第 1 回スキル・トレーニングの 3 週間後に第 2 回スキル・トレーニングを実施し、それぞれでプログラムに対する評価を得た。参加者はグループ X では第 1 回 8 名、第 2 回 7 名で、グループ Y では

第１回６名、第２回５名であった。
(1)第１回スキル・トレーニングの内容と参加中の反応
①「自分の体調や気持ちをお母さんやお父さんに上手に伝える」をテーマとし、そのポイントを教示して、うまく伝えている例とうまく伝えられない例を提示し、練習を行った。どちらのグループも自分から積極的に発言をすることは少なかった。
②グループＹでは、体調や思っていることを医師に伝える経験に関する問いに対して「ない」、希望として伝えたいことに対しても「希望はない」との反応が聞かれ、全体を通して実施中の発言はグループＹよりグループＸの参加者に多く見られた。交渉スキル・トレーニング中の説明は集中して聞いており、提示された例に対する感想を問うと率直に答えていた。
(2)第２回スキル・トレーニングの内容と参加中の反応
①「医師や親の意見と自分の希望が合わないときは話し合ってみよう」をテーマとし、交渉スキルの例とポイントを提示し、設定した状況を用いて練習を行った。
②練習では、グループＸは男女別のグループを編成して、それぞれロール・プレイを発表した。役割分担やロール・プレイの発表は各グループで話し合って進めており、お互いの発表の時には自然に拍手が起きていた。グループＹではロール・プレイの発表まで至らず、「お母さんに言ってもらった方がちゃんと伝わる」「どうして、車で送ってもらわないのか、この人の気持ちがわからない」など、状況設定の場面での役割を演じることは難しいとの反応があった。
(3)交渉スキル・トレーニングの評価
①質問紙調査では、参加者のほとんどが肯定的な評価をしており、第１回、第２回ともに全員が「楽しかった」「わかりやすかった」「他の人の話を聞くことができてよかった」と評価し、１名を除き「試してみようと思った」「役立つ内容だと思った」と評価していた。
②第１回の自由記載ではグループＸでは同じ病気の人に出会えたことがよかったとする者が多く、グループＹではこれから試していきたいとの感想を持っている者が多い傾向にあった。第２回の自由記載ではグループＸでは練習で発表した内容から具体的な交渉スキルに関する感想の記載があり、グループＹでは自分の振り返りとして記載が多い傾向があった。プログラム終了後、参加者は「自分と同じような人がいるんだって、なんか、嬉しかった」「自分の病気をちゃんとわかってくれると思った」と参加した体験を肯定的に評価していた。

3)看護師のセルフマネジメント支援の困難と学習ニーズ
研究協力を得た２施設の看護師に対して面接調査を行い、以下のことが明らかとなった。
(1)セルフマネジメント支援の困難
小児慢性疾患の思春期患者は、母親を介した医師とのコミュニケーションをとっている者も多く、思春期患者自身の考えや反応を十分にとらえていないと感じることがある。実際のケアでは、病気について、あるいは症状マネジメントに対する考えなど、どのように話をするのがいいのか判断に迷うことがある。そのため、小児慢性疾患の思春期患者の対応に対しては、苦手意識をもつ看護師も多い状況である。
(2)学習ニーズ
実際の関わり方や支援の方法、セルフマネジメント支援は、小児慢性疾患患者の発達を見ていると重要であると考えるため、知識やスキルを得たいと考えている。しかし、学習会等は身近にないため、学習会があれば参加したいと考えている。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）
〔学会発表〕（計２件）
1)野間口千香穂：小児慢性腎臓病思春期患者のセルフマネジメント支援プログラムの開発－交渉スキル・トレーニングの展開と評価－，日本小児看護学会第 22 回学術集会，2012 年 7 月 21 日（盛岡市）
2)野間口千香穂：小児慢性腎臓病思春期患者のセルフマネジメント支援プログラムの影響－面接調査の結果から－，第 32 回日本看護科学学会学術集会, 2012 年 11 月 30 日（東京都）

６．研究組織
(1)研究代表者
野間口　千香穂（NOMAGUCHI CHIKAHO）
宮崎大学・医学部・教授
研究者番号：４０２３７８７１